

# サシャ・ギトリの戯曲と映画における幸福観

Michel de Boissieu

サシャ・ギトリは日本であまり知られていないが、フランスでは二十世紀前半の代表的な俳優・監督・劇作家の一人であるとみなされている。ギトリは1885年に生まれ、1957年に死んだ。戯曲を124本執筆し、その中の17本を自分で映画化して<sup>1</sup>、また自分で書いたシナリオを基に映画をさらに19本作った。確かに、ギトリの演劇はいわゆる純文学ではなく、むしろ大衆文学であると思われるせいか、フランス文学史の教科書などにほとんど載っていないし、高校で教えられることも、大学で研究されることも、あまりない。しかし、ギトリの戯曲はどれも成功をおさめ、いまでもフランスの劇場でしばしば上演されている。ギトリの戯曲は19世紀の通俗喜劇、いわゆるヴォードヴィルの伝統を継承している。主なテーマは男女関係と親子関係である。主人公は、妻が浮気をしている夫、人妻と関係を結んでいる男、父と対立している息子、などである。戯曲の雰囲気はかなり軽いが、作家の目的は観客を笑わせることだけではなく、むしろ観客を笑わせながら真面目な教訓を伝えることである。サシャ・ギトリは特に、幸福の条件とは何か、という問いにこだわっているのである。サシャ・ギトリの登場人物はみな、自分たちが経験している人間関係の中で幸福を追い求めている。彼らは、私たちに何を教えているのであろうか。サシャ・ギトリの作品における幸福観を分析するために、サシャ・ギトリの代表的な戯曲と映画を紹介することによって、幸福と時間、幸福と社会、幸福と経験、という三つのテーマを検討したいと思う。

## 1) 幸福と時間

サシャ・ギトリによる幸福観の一番注目すべき特徴は、時間との関係である。この特徴は、『夢を見ましょう』(*Faisons un rêve*)という、1916年に執筆され、1936年に映画化された戯曲で明らかとなる。この作品の主な登場人物は「彼」、「彼女」と「彼女」の夫である。「彼」は、自分の高級住宅で催したパーティで「彼女」と知り合いになり、すぐ恋に落ちる。ある晩、「彼女」は初めて「彼」を一人で訪ねる。「彼女」はもともと、「彼」と一緒に一時間ぐらい過ごし、夫が帰宅する

---

<sup>1</sup>すべての引用は映画による。

前に家に帰るつもりであった。ところが、「彼女」と「彼」は思わず眠り込んでしまう。眼がさめると、朝8時である。「彼女」は、夫にどのように事情を説明すべきか、全く分からず、パニック状態に陥ってしまう。「彼」は「彼女」を安心させるために、自分が責任をとって君と結婚するので心配しなくてもいい、と言う。その時、誰かがベルを鳴らす。召使いに訊くと、「彼女」の夫なのである。「彼女」はあわてて浴室の中に隠れ、「彼」は「彼女」の夫に居間で会う。実は「彼女」の夫も外泊し、妻にどう事情を説明すべきか悩み、それで「彼」に相談してきたのである。「彼」は「彼女」の夫に、お婆さんが今にも死にそうなので、その世話をしに行くという口実で、二日間夫婦の住居を離れることを勧める。「彼」に感謝して、夫が急いで立ち去ると、「彼」は浴室に隠れている「彼女」を解放しに行く。戯曲は次の台詞で終わる。

Elle: Nous avons toute la vie ?

Lui: Mieux que toute la vie !

Elle: Mieux que toute la vie ?

Lui: Oui, nous avons deux jours !

彼女：私たち、これからも一生、会えるかしら？

彼：いやあ、それよりずっといいことがある！

彼女：それよりもいいことって？

彼：さあ、二日間、楽しもうじゃないか！

こういった台詞は半分冗談でありながら、幸福の条件に関するとても重要な教訓を伝えている。幸福になるために、愛人と結婚すべきどころか、愛人と二日間だけ過ごすべき、ということである。なぜなら、時間が経つと情熱、興奮、愛情が消えてしまい、そのかわりに無関心、退屈、憎しみが現れるからである。つまり、サシャ・ギトリによると、持続と不変が幸福の妨げとなり、逆に時間の有限性が幸福の条件となる。この説はとても独創的であると言えるであろう。サシャ・ギトリは、時間の有限性は幸福の制限ではなく、幸福の条件であると言うことによって、幸福と時間との関係の伝統的な説を覆すのである。幸福と時間の持続性は、フランス文学にしばしば出てくるテーマであるが、このテーマがどのように展開されてきたかを簡単に説明したいと思う。

幸福と時間という問題はもともとキリスト教の影響の強いテーマであった。フランスの中世の代表的な詩人、フランソワ・ヴィヨンの傑作『遺言の歌』を読むと、

どのようにフランス人の幸福観がキリスト教の影響を受けたかがよく分かる。『遺言の歌』(Le Testament)は非常に長い詩なのであるが、第29節だけを引用する。

Où sont les gracieux galans  
Que je suivoye ou temps jadiz  
Si bien chantans, si bien parlans,  
Sy plaisans en faiz et en diz?  
Les aucuns sont mors et roidiz :  
D'eulx n'est il plus riens maintenant ;  
Respit ilz aient en paradis,  
Et Dieu sauve le remenant !  
今 何処にいるのか、むかし付合った  
仲間の奴原、話上手で、歌上手、  
その振舞いも口前も 面白可笑しく  
雅かと言いたいほどの 遊冶郎。  
そのある者は 死んで冷たい軀となって、  
今はもう何も残らぬ空の空。  
天国でゆっくりおやすみなさりませ、  
この世に残る者どもを 神様 お救い下さりませ。<sup>2</sup>

ヴィヨンは天才的な詩人であったが、「遊冶郎」、すなわち放蕩者でもチンピラでもあった。窃盗などの危険な遊びの結果、死刑を宣告されたこともあるが、結局フランス王に恩赦を与えられ、刑務所を出てから『遺言の歌』を書いた。ヴィヨンはこの詩において、自分が放蕩者になってしまったことを後悔している。なぜなら、どれほど喜びと快楽で充実していたとしても、人生はあっという間に消え去るからである。ヴィヨンの友達はほとんど既に「死んで冷たい 軀となつたし、彼自身はかろうじて生き残ったとしても、いつかは死んでしまうであろう。つまり、人生ははかなく、つかの間の幸福は幻想や夢のようであり、手に入れる価値のないものなのである。聖書に書いてあるように、この世は「空の空、いっさいは空」である。このように反省したヴィヨンにとって、唯一の本当の幸福は、この世の快楽ではなく、「天国」の幸福となるのである。この世で体験する喜びとは異なり、天国で楽しむ幸福は永遠だからである。人間が求めるべきは、この世のはかない快楽ではなく、死んでから天国に入るために必要な神の「救い」である。時間の有限性のなかにある現世の幸福は、天国の永遠の幸福とは比べ物にならないので、

<sup>2</sup> 『ヴィヨン全詩集』鈴木信太郎訳(岩波書店、1960)64-65頁

無視すべきものである、という説である。

16世紀には、このようなキリスト教の伝統的な説とは違った説、すなわち古代ギリシャ・ローマの思想の影響を受けた説が流行した。ここでは、16世紀のフランスの一番有名な詩人、ロンサールの「カッサンドルへのオード」(« Ode à Cassandre »)の最後のところを引用したいと思う。

Donc, si vous me croyez, mignonne,

Tandis que vostre âge fleuronne

En sa plus verte nouveauté,

Cueillez, cueillez vostre jeunesse :

Comme à ceste fleur la vieillesse

Fera ternir vostre beauté.

それだから、恋人よ、もし私を

信じてくれるのならば、こよなくみずみずしく

咲きほこるその年齢のあいだに、

摘め、摘むがよい、君の若さを。

この花と同じように、やがて老いが

君の美しさを、褪せさせてしまうのだから。<sup>3</sup>

この詩を書いた時、ロンサールはカッサンドルと名付けた若い美女を熱愛し、彼女に言い寄っていたが、彼女は明らかに冷たく、ロンサールを無視していた。ロンサールがこの詩を書いたのは、彼女を説得するためである。詩において展開されている論旨は分かりやすいであろう。カッサンドルは若く、春に咲いている花のように美しいので男性に愛されている。しかし、春があつという間に消え去るように、彼女の青春もあつという間に消え去るであろう。そうしてカッサンドルが醜い老女になり、男性によって無視され、寂しい晩年を送るのは必然である。つまり、後の祭りにならないうちに、ロンサールが書いているように、若さを「摘め」るうちに、カッサンドルは恋の喜びを楽しむべきなのである。

若さを「摘め」という表現は、古代ローマの詩人ホラティウスの「今日1日を摘め」、すなわち「今日を楽しめ」という表現を思い出させる。ロンサールは同時代の詩人と同じく、古代ギリシャ・古代ローマの文学に多くの表現を借りている。この詩において、ロンサールがホラティウスに借りた言葉は、古代ギリシャの哲学者エピクロス思想を伝える表現である<sup>4</sup>。エピクロスは、人間はできるだけ苦痛

<sup>3</sup>安藤元雄、入沢康夫、渋沢孝輔編『フランス名詩選』(岩波書店、1998) 39-41頁

<sup>4</sup>エピクロス『教説と手紙』出隆訳(岩波書店、1959) 参照。

を避けるべきだと考えた。確かに、人生には病気、老化、事故、戦争、迫害、失恋など苦痛の原因が数えられないほどたくさんあるので、苦痛を避けるのは不可能である。幸福の日々がいつか終わるのは必然的である。しかし、幸福の日の後に不幸の日が来るのが分かっているからこそ、人間は幸福の日を一層よく楽しむべき、また一層長く延長すべきなのである。この点で、ロンサールの詩に表現されているエピクロスの説は、ヴィヨンの詩で明らかになったキリスト教の説とは違っている。ヴィヨンがこの世の喜びを無視してしまったのに対し、ロンサールは身体的快樂を重視し、価値のあるものとしている。しかし、ロンサールはヴィヨンと同じく、幸福が時間の有限性をまぬがれないことを意識している。こういった意識が、ロンサールの詩に感じられる悲しみの原因となる。

最後に、幸福と時間との関係がどのように19世紀のロマン主義によって描かれたかを簡単に紹介したいと思う。そのために、アルフォンス・ド・ラマルチーヌの代表的な詩「みずうみ」(« Le Lac ») について説明する。この詩の最初のところに、絶望的な臆想に沈んでいるラマルチーヌ自身の姿が湖の岸に見えてくる。彼は一年前に、この湖に愛人と一緒に来たのであるが、彼女はその時、一年後にまた一緒に来ることを約束したにもかかわらず、約束を破って、可哀想なラマルチーヌを捨てたのである。このように一人残されたラマルチーヌは、一年前に湖上の船遊びをしながら愛人が言ったことを思い出す。

Ô temps, suspends ton vol ! et vous, heures propices,

Suspendez votre cours !

Laissez-nous savourer les rapides délices

Des plus beaux de nos jours !

おお、時間よ、飛翔をとどめよ。おまえたち、

幸福の刻一刻よ、あゆみをとどめよ。

わたくしたちの一生でもっとも美しい日のつかのまの愉快を、

こころゆくまで味わわせておくれ。<sup>5</sup>

詩人の愛人がこのように「時間よ、飛翔をとどめよ」といったのは、彼女が最高の喜びに達したため、これほどの幸せは二度と味わえないことを意識しているからである。しかし、「時間よ、飛翔をとどめよ」と言いながらも、時間が飛翔をとどめるのは不可能である、ということを彼女はよく知っている。また、「つかのまの愉快」を「味わわせてくれ」と言っているが、愉快がつかのままでしかありえないという不幸な意識のせいで、本当に幸福を味わうことはできないであろ

---

<sup>5</sup>安藤元雄、前掲書、59-67頁

う。このような不幸な意識がロマン主義の悲劇的人生観の原因となるのである。つまり、やっと幸福になったと思う瞬間に、この瞬間があつという間に消え去るだろうという意識によって、幸福は台なしにされるのである。ラマルチーナは愛人の言ったことを思い出した後、次のように書いている。

Eternité, néant, passé, sombres abîmes,  
Que faites-vous des jours que vous engloutissez?  
永遠よ、虚無よ、過去よ、暗い深淵よ、  
飲み込んでいくその日その日を、おまえたちはどうするのだ？

こうして、ラマルチーナの精神状態はヴィヨンとロンサールの精神状態とは違う。確かに、ヴィヨンとロンサールにとっても、この世の幸福がつかのまでしかないのは惜むべきことであった。しかし、ヴィヨンは天国における永遠の幸福を信じ、ロンサールは完全な幸福の日を楽しむことができると信じている。ラマルチーナにとっては、神の救いも、不幸な意識をまぬがれた幸福も、ないのである。幸福の瞬間がすぐに暗い「虚無」の中に飲み込まれるのだから、幸福を探すのは無駄である、という絶望的な説となる。

このようにフランスの文学史を検討してみると、時間の有限性は幸福の惜むべき制限である、とみなされてきたことが明らかになる。しかし、『夢をみましょう』の最後の台詞で表現されているように、サシャ・ギトリは時間の有限性を幸福の必要条件としている。この独創的な説は、サシャ・ギトリにとって人間の本性とは何か、という問いに結びついている。サシャ・ギトリによると、人間はつねに変わっていくべきものであり、いつも新しい刺激を必要としているものなのである。それゆえ、新しい刺激がなければ、また新しい経験をしなければ、満足できる充実した生活を送ることはできない。『新しい遺言』(Le Nouveau Testament) という、1934年に執筆され、1936年に映画化された戯曲の主人公は「3、4年ごとに取り巻きを変えるべきだ」(Il faudrait changer d'entourage tous les 3 ou 4 ans)、と言っている。つまり、3、4年ごとに妻、愛人、子供、友達、同僚などと別れて、新しい妻、愛人、子供、友達、同僚などを手に入れるのが望ましい、ということである。つねに変化する人間関係ができれば、人間はつねに変化し幸福になれる、というわけである。以上のような説明から、なぜサシャ・ギトリが時間の有限性を幸福の条件としているのかが、明らかになったのではないであろうか。

## 2) 幸福と社会

しかし、サシャ・ギトリは自分の作品でこのように幸福の条件を説明すると同時に、私たちの社会では人間が幸福になれないということを明らかにしている。1953年に公開された映画『誠実な男の生涯』(*La Vie d'un honnête homme*)をみるとそれがよく分かる。この映画の主人公はアルベールという大金持ちの実業家である。アルベールはある日、双子の兄弟アランの訪問を受ける。アルベールとアランは、顔は瓜二つであるが、性格と生き方は全く違っている。誠実なアルベールが勤勉に働き続け、出世したのに対し、のんきなアランは自由気ままに、途方もない生活を送ってきた。アランはさまざまな仕事をしたことがあるが、身元を偽って人をだますのがもっとも得意な商売である。つい最近カナダにいたが、浮浪罪で逮捕され、国外追放されてしまった。それでもアランは少しも後悔していない。「1、2ヶ月間…自分とは違った人間になることほど、面白いことはない」(*Etre un autre que soi pendant…un mois, deux mois, c'est plus qu'intéressant*)、と言っている。フランスに帰ってきたアランがアルベールを数年ぶりに訪れるのは、お金を無心するためである。アルベールは双子の片割れに対して強い嫌悪感を抱いているので、お金を少しだけ与え、家から追い出すが、あとで反省し、みずばらしいホテルに泊まっているアランを訪れることにする。しかし、アルベールがホテルの部屋につくと、アランは心筋梗塞で死にかけている。息を引き取ったアランを眺めていたアルベールは少し考え、死体の服や身分証明書を自分のものと交換することにする。なぜなら、アランが何度もしたように、アルベールも一度だけ、しばらくの間「自分とは違った人間」になりたくなったからである。

アルベールが死んだアランになりかわって生きてみると、二つの事実が明らかになる。まず、ホテルの経営者、隣の部屋に住んでいる売春婦、街かどのカフェのボーイなどは、皆アランを愛しているが、誰もアルベールを愛していない、ということである。妻と子供たちは彼のお金にしか興味がなく、彼自身にはまったく無関心なのである。また、会社の部下たちがアルベールに対して抱いている感情は、恐怖や尊敬であるが、決して愛情ではないのである。さらに、アルベールがアランになってから初めて好きなように時間を過ごし、初めて自由を味わえるようになった、ということも明らかになる。アルベールは、それまで自分の欲望をみたすために生きてきたのではなく、むしろ家族、同僚、世間などの期待に応じて生きてきたのである。こういう事実が分かったアルベールは、自分よりアランの方がはるかに幸福だったということを悟り、これからはアランのように放浪生活を送ることにし、最後には行方不明となってしまう。

こうしてサシャ・ギトリが『誠実な男の生涯』において伝えている教訓は、我々の文明化された社会では幸福に生きることが不可能になっている、ということ

ある。社会にすっかりとけ込んでいるアルペールは不幸であり、社会の周辺に生きるアランは幸福なのである。こういった文明化された社会に対する批判の起源はいうまでもなく、18世紀の哲学者ジャン・ジャック・ルソーの思想にある。ルソーは『学問芸術論』(*Discours sur les sciences et les arts*)、『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*)などのエッセーにおいて、文明化された社会を徹底的に批判している。一言でいえば、ルソーは、文明化された社会では人間の本性、すなわち幸福の条件が完全に無視されているので、人間は不幸でしかありえない、と考えた<sup>6</sup>。この批判は19世紀および20世紀の西洋思想に多大な影響力を及ぼした。例えば、精神分析の樹立者フロイトは、1929年に刊行された『文明への不満』というエッセーにおいて、人間は文明の要求に従って欲望を犠牲にしているが、そのために不幸になる可能性が高い、という説を展開している<sup>7</sup>。サシャ・ギトリはフロイトの同時代者であり、喜劇の形で同じような教訓を伝えていると言えるであろう。

『新しい遺言』の主人公は「3、4年ごとに取り巻きを変えるべきだ」と言っているが、このように「取り巻きを変える」ことが社会によって許されるはずはない。社会の目的はむしろ、人間を固定させるような制度をつくることなのである。人間にはいつも新しい経験をやる欲望があるにもかかわらず、社会は一定の仕事に人間を固定することを要求し、その欲望を妨害している。また、人間にはいつも新しい異性と関係を結ぶ欲望があるにもかかわらず、社会は結婚制度によってその欲望をも妨害している。この意味では、家庭や仕事が自由を拘束する場になり、人間を不幸にするところになってしまう。サシャ・ギトリが特に批判している制度は結婚である。例えば、1927年に執筆され、1937年に映画化された『デジレ』(*Désiré*)という戯曲は、政治家の愛人となった女優の話である。ある日、女優の料理人が下女に「政治家はいつ女優と結婚してくれるのだろうか」と訊くと、下女は「もう彼が彼女を愛さなくなった時」(*Quand il ne l'aimera plus*)と答えている。つまり、サシャ・ギトリの作品においては、愛と結婚は両立できないのである。生きている愛がいつも変化し、新しい相手を求めているかぎり、一定の相手に固定することを要求する結婚制度は、死んだ愛を前提としているからである。

こうして、変化を必要とする人間の欲望を妨害している社会においては、幸福になるのは難しいことである。『新しい遺言』では、主人公が昔の愛人を思い出し、「人生の唯一の楽しい瞬間は、間違いを犯すために盗みとられた瞬間だ」(*Les seuls moments agréables de la vie sont ceux qu'on a volés pour commettre*

<sup>6</sup> 『学問芸術論』前川貞次郎訳(岩波書店、1968)と『人間不平等起源論』中山元訳(光文社、2008)参照。

<sup>7</sup> フロイト『幻想の未来/文明への不満』中山元訳(光文社、2007)参照。

des fautes) と言う場面がある。つまり、幸福の瞬間を盗みとるために、世間の目をくぐりぬけ、世間が間違いや罪とみなしていることをしなければならぬ。あえて言うなら、サシャ・ギトリの作品に登場する幸福な人は皆、世間によって変人や狂人、あるいは悪人とされている人物である。

例えば、1919年に執筆され、1936年に映画化された戯曲『父は正しかった』(*Mon père avait raison*)の主人公シャルルがそうである。シャルルはいつも真面目に仕事をし、真面目に息子を育て、真面目に稼いだお金を妻に渡し、すなわち真面目な生活を送っている。しかしある日シャルルは、愛人が出来た妻に突然捨てられてしまう。シャルルは反省し、自分の生き方を変えること、つまり気ままに暮らすことにする。そのおかげで、初めて幸福を体験するのである。しかし、高級なレストランで食事をしたり、美しい絵を買ったりするシャルルの様子は、周囲の人たちに妙だと思われてしまう。下男も息子も、シャルルは頭がおかしくなったのではないかと恐れ、医者を呼ぶことにする。医者はさりげなくシャルルと話した後、シャルルがただ「軽薄」(futile)になっただけであり、深刻ではないと診断する。つまり、文明化された社会では、軽薄になること、すなわち勝手気ままに暮らすことが一種の狂気だとみなされているのである。

また、1936年に公開された映画『とらんぶ物語』(*Le Roman d'un tricheur*)の主人公は変人ではないが、悪人だと言えるであろう。彼は子供の時、ある日、両親のお金を盗んでしまう。すぐにばれて、罰として、昼食を与えられない。その日、昼食のメインは祖父が森で摘んだキノコである。しかし、祖父はぼけているので毒キノコを摘んでしまった。その結果、キノコを食べなかった主人公以外、家族は全滅してしまう。こうして孤児になった主人公は反省し、「みんなは盗まなかったから死んで、ぼくは盗んだから生き残った」(J'étais vivant parce que j'avais volé. De là à en conclure que les autres étaient morts parce qu'ils étaient honnêtes…)という結論に達する。別の言い方をすれば、善は罰せられ、悪は報われる、ということになる。そこで主人公は、それからはできるだけ不誠実な生活を送ることにするのである。このような逆説的な教訓には、サシャ・ギトリから見た社会の不条理が含まれている。社会の規則を守る人が幸福になれないのであれば、幸福になるために規則を破るべきなのである。『とらんぶ物語』の主人公は窃盗やばくちで生き、波瀾万丈な生活を送るが、最後に回想録を書くことになった時、自分は幸福だったと気づく。

ようするに、幸福が時間の有限性を前提としているのであれば、結婚のような制度で持続性を保証しようとしている社会は、幸福の条件を無視し、幸福をほとんど不可能としていることになる。しかし、サシャ・ギトリの考えでは、社会は幸福の唯一の妨げではない。

### 3) 幸福と経験

なぜかという、幸福はある意味では時間の有限性を前提としているのにもかかわらず、別の意味では時間の持続性を必要としているからである。一言でいえば、幸福になるには時間がかかる。サシャ・ギトリはこの説を『父は正しかった』において展開させている。主人公シャルルをすでに紹介した。しかし、戯曲の第一幕においては、シャルルは妻に捨てられ、生き方を変えた中年男性ではなく、30歳の結婚している男性である。最初のところで、シャルルは72歳の父アドルフの訪問を受ける。アドルフは自分の人生観をシャルルに説明する。アドルフによると、幸福の条件はエゴイズムにある、というのである。彼は糞まじめな精神を軽蔑し、道徳、家族、友情などを信じていない。亡くなった妻が非常に退屈な女性だったので、死んでよかった、とさえ言っている。そればかりか、妻に死なれてから、初めて幸福を味わうことが出来るようになった、と付け加えている。自由になったアドルフはのんびり暮らし、幸福を経験している。しかし、真面目に働きながら真面目に家族の世話をしているシャルルはなかなか納得できず、父は頭がぼけてきた哀れむべき人である、と思う。それでもアドルフは、シャルルがいつかきつと納得できるようになるだろう、と断言する。そして20年後、妻に捨てられ50歳の中年男性になったシャルルは、やっと「父は正しかった」と悟り、父アドルフと同じような生活を送ることにする。しかし、すでに述べたとおり、皮肉なことに、今度はシャルルの息子が父をおかしいとみなす。つまり、サシャ・ギトリの登場人物の中では、幸福になれるのは50歳を超えた人だけである。30歳、40歳ではまだ、幸福の妨げとなるさまざまな幻想、偏見、嘘などのとりこなのである。幸福になる条件は、幻想、偏見、嘘を捨てることであるが、そのためにさまざまな経験を重ねることが必要となる。この意味では、幸福になるのは時間がかかることなのである。

それは、1939年に公開された映画『独身が9人いた』(Ils étaient 9 célibataires) をみるとさらに明らかになる。この映画の主人公はジャンという詐欺師である。ある日、ジャンは新しい詐欺を思いつく。フランス国籍を獲得したいお金持ちの外国人女性に貧乏なフランス人男性を紹介し、肉体関係のない、形式だけの結婚を行うというものである。新郎新婦は結婚式の日、市役所で初めて会ってから永遠に別れる手はずになっている。いうまでもなく、形式だけの夫と、詐欺を思いついたジャンとは、相当な手数料をもらう。ジャンは9人の女性からこのような結婚の依頼を受け、9人の男性を探すことになる。見つかったのはホームレス、永遠の失業者、元囚人、など社会の周辺に生きる人たち。平均年齢は70歳。きつとうまくいくだろう、とジャンは推測する。しかし、結婚式の日が来ると、約束したお金をもらった新郎たちは蒸発するどころか、新婦と一緒に

に夫婦の住居に行くことにしてしまう。結局、あらゆる期待に反して、新郎新婦はほとんど幸福になるのである。例えば、新郎の中には、アントナンという元計理士がいる。彼は脱税の共犯で禁錮刑に処されたことがある。アントナンが結婚したのは、大金持ちで非常にケチな女性である。アントナンは、税金をぜったい払いたくない妻に、巧妙に脱税をする方法をすべて教える。その結果、妻は役に立つ夫に情熱的な愛着をもってしまう。また、アメデという新郎もいる。アメデが結婚したのは、中国出身のサーカスの芸人である。サーカスに行ったアメデは、妻が舞台上で踊っているのを見て、どうしたわけか舞台上に飛び込み、一緒に踊り始める。若い柔軟な中国人女性と、手足がだらんとした人形のような老人とがあまりにもグロテスクなペアとなるので、観客が皆ゲラゲラと笑い出してしまう。このように大成功をおさめた夫婦は、サーカスのマネージャーに3年の契約をもらい、それから一緒に働き続けることになる。

サシャ・ギトリの戯曲と映画においては、結婚はほとんど失敗に終わってしまうが、『独身が9人いた』の結婚、つまり詐欺師が企んだ、法律違反になる結婚だけが幸福な夫婦を生み出している。ここにももちろん、結婚制度に対するサシャ・ギトリの皮肉な批判も含まれているのであるが、注目すべきは、9人の独身が皆、60歳を超えている、ということである。60歳を超えた時、人間は幸福な結婚に必要な知恵と経験を持っているのである。ここで、サシャ・ギトリの私生活について言及することが必要となるであろう。サシャ・ギトリは結婚を4度もした。4度目の結婚式の日に、彼は新婦にこう言いつた。「前の3人は僕の妻でしかなかったが、君は僕の未亡人となるよ」(Les autres furent mes épouses, vous, vous serez ma veuve)<sup>8</sup>。その時、サシャ・ギトリは64歳であり、新婦は32歳であった。だから、サシャ・ギトリが言いたかったのは「僕はまもなく死ぬから、大丈夫だよ。そんな短期間で僕たちが飽きるはずはないだろう」ということかもしれない。しかし、「僕は前には結婚に必要な知恵と経験を持っていなかったけれども、64歳になったので十分に成熟した」、という意味もあると思われる。

つまり、サシャ・ギトリは経験を幸福の条件としている。日本人は体験と経験という、フランス人にとって分かりづらい区別をしている。フランス文学者森有正は、「体験」は直接の、知覚感覚的なものであり、「経験」は思想と言葉によって変えられた体験である、と述べている<sup>9</sup>。サシャ・ギトリの戯曲と映画においては、若者は幸福を体験しても、経験することはできないのである。幸福の経験は、50歳を超えた人の特権なのである。すでにみたように、『新しい遺言』の主人公は25歳の時、不倫の恋を「体験」した。しかし、この不倫の恋を「経験」するのは、

<sup>8</sup> Dominique Desanti, *Sacha Guitry, 50 ans de spectacle*, Grasset, 1982参照。

<sup>9</sup> 森有正『経験と思想』(岩波書店、1977)参照。

「このつかのまの恋が我が人生の唯一の幸福の瞬間だった」ということを悟った時、つまり50歳になった時である。経験には知恵が必要となるからである。

こういった知恵は、『新しい遺言』の主人公が言っている次の言葉にも含まれているであろう。「我々の年齢では、また我々の時代では、起った出来事はすべて好ましい出来事だと考えなければならない」(A nos âges et à notre époque, nous devons considérer que tous les événements qui arrivent sont des événements heureux)、という言葉である。べつの言い方をすれば、幸福になるためには楽観的でなければならないのである。『新しい遺言』の主人公が言っている「我々の年齢」とは50歳、すなわち死を意識しはじめる年齢である。このように死の陰の下で生きる50歳の人は、もう失うものが何もなく、楽観的かつ軽薄になるしかないのである。「我々の時代」とは、『新しい遺言』が執筆された、いわゆる両大戦間を示している。その時代には、第一次世界大戦のショックを受けたフランス人は、第二次世界大戦が近づいているのを予感していた。つまり、サシャ・ギトリが自分の代表的な作品をつくった時代は、西洋文明の崩壊を目撃したフランス人が、次はどうなるかという不安にかられた時代である。サシャ・ギトリはこの時代に、幸福の不可欠な条件としての楽観を是が非でも堅持してみた作家なのである。

以上、考察したように、サシャ・ギトリの幸福観は複雑なものである。一方では、人間はつねに変化と新しい刺激を必要としているので、幸福は持続せず、限られた時間の中にしか幸福はない。他方では、変化に対する人間の自然な欲望は社会的な制度や圧力によって妨害されている。また、幸福を味わうのに必要な経験と知恵を獲得するには、相当な時間がかかる。サシャ・ギトリはもちろん、哲学者ではなく、喜劇作家なので、筋道の通った、完全に論理的な議論を展開することはない。それでも、サシャ・ギトリの作品には、矛盾に満ちた人間存在と幸福の条件に関する、多面的で興味深い考えを見出すことができる、と思われる。